

琉球王朝時代の祭祀における植物のシンボリズムと聖地・女性

平良 直（倫理文化研究センター専門研究員）

序にかえて一人間と食、その環境世界との連続性

人間が生きていくには食物を摂取しなければならないというのは自明のことである。食物がなくなれば飢えて命を維持することができなくなる。この食べるということによって生命を維持するという人間の基本的な事実を、理解はしていても平穏な暮らしができていればそれほど意識することはない。もちろん、「食べていくために働く」といった言葉があるように、生きることと、食べることは不可分なこととして人間の労働や活動の基本部分にあるのだという認識があるのは確かであるが、食物を得ることは金銭を所持しているかどうかということと同義となっており、食べ物は金銭さえあれば、コンビニやスーパーマーケットで入手することができるというのが現代人の食物に対する日常的な認識である。スーパーの棚にならぶ食物はどのようにして、どこで、誰が作ったものかということを見えにくくし、歴史上かなり以前から、生き物を自ら屠畜し食すということはなくなり、すべてが分業化され、人間自身が生きるために必須な食物の摂取における直接的なつながり、環境世界との連続性、そして人間が動植物の命を喰らって生きているという事実が見えない状態になっている。肉は「たんぱく質」として、穀物は「炭水化物」といった栄養素の呼称で認知され、命を食し生きている事実はできるだけ隠蔽される。現代人にとって人間が多く命との連続性のなかで生かされているということは理性的には理解できても、日常的にそのことを実感することは極めて難しいといってもよいだろう。

このような状況における意識は近代社会特有のものだともいえる。これに対して伝統的な社会は、人間が何によって存在しているのかということにしっかりと向き合ってきたのだということをも民族や共同体が伝承してきた神話や儀礼群が気づかせてくれる。たとえば、日本の民俗に伝承されてきた多くの農耕儀礼を見てもそのことは明瞭である。様々な農耕の予祝儀礼は、神々や祖霊の力にあずかるなかで我々が生かされていることを繰り返し思い出させてきた。東南アジア地域にひろくみられる稲に神霊が宿るとされる稲魂信仰は日本にもあり、田の神への信仰となってその痕跡をとどめる。稲魂は古くは延喜式にウカノミタマ（宇賀能美多麻）を意味するものとされており、『古事記』にも出てくるウケノミタマは神道五部書では、身体が五穀の起源となるオホゲツヒメ（大気津比売神）のことを意味するとされている。五穀を食すことが神の霊力を食すこと、さらには神（女神）の身体を食すことであるという連続性をこの神話の穀物起源は教えている。このような穀物や植物を食することが神を食することを伝える神話は世界中に多様な形態で存在する。よく知られたハイヌヴェレ神話などもそのひとつである。

人間が何によって生かされているのかということをも、この農耕における穀物起源神話は教えているが、このことについて、人類の宗教史を俯瞰した立場から、ミルチャ・エリアーデは、「農耕の発見の、最初の、そしておそらくもっとも重要な結果は、旧石器時代の狩猟民の価値に危機を招来したことである。宗教的秩序の動物界との関係は、人間と植物との神秘的連帯性とよばれるものによって、とって代わられた」としている。人間の生と、環境世界との連続性への宗教的意識は、エリアーデが「宗教的秩序の動物界との関係」という言葉で表しているように、狩猟採集社会におけるその連続性は農耕社会のなかで見られる以上に強く連関する世界観のなかでとらえられていた。（中略）

本稿表題に掲げた「琉球王朝時代の祭祀における植物のシンボリズムと聖地・女性」は前述してきた

人間と植物、とりわけ聖なる植物との連続性を考察しようとするものである。本テーマに関する関心は数年前から抱いていたものである。その中心的関心は、琉球王朝の王権は宗教的には女性祭祀組織によって支えられていたが、その女性祭祀組織の様々な儀礼は、王朝を維持させていくために必要な穀物の豊穡をもたらす儀礼がその根幹となっており、さらにその豊穡儀礼が女性によって担われていたのは、植物と女性の象徴的な連関の中で霊力の顕現を繰り返し顕在化するためであったのではないかということ考察することにある。このような問題意識のもと、筆者は2011年6月に行われた愛知県立大学での学術フォーラム『神獣と古代王権』において「琉球王朝の動植物のシンボリズムと王権」とのタイトルで発表を行っている。2012年には、「琉球王朝における植物のシンボリズムと聖地」として日本宗教学会において発表を行った。その後、考察を整理して論文にする機会がなかったため、中断していた考察を再開し今回『紀要』への寄稿を契機に考察を進めてみようとするものである。(中略)

本稿の意図はさしあたり琉球王朝時代から管理されてきた聖地における植物の象徴的機能を理解しようとするものであるが、近年の世界遺産登録後の聖地の観光化にともなう聖地の管理・専有の問題、現代的状況の中での聖地の非聖地化と新たな「聖地化」といった聖地の変容の問題と関連付けることをもくろんでいる。

本稿では、1713年に編纂された『琉球国由来記』中の御嶽の神名を手掛かりに王朝・聖地・植物の象徴との関連を探り、王朝の巫女組織制度のなかでどのような機能を果たしてきたのかを見ていきたい。考察では、琉球・沖縄史の概観、宗教伝統の特徴の予備的な説明を行い、『由来記』記載の植物の名称がそのまま神名になっている事例を取り上げながらどのような象徴連関や意味の解釈が可能かを探っていきたい。表題の示す通り、まとまった論文にするにはかなりレンジの広いテーマであり、研究ノートの考察とならざるを得ないが、考察を今回で終わるものと限定しないで取り組んでみたいと思っている。